

## 縄文時代中期から後・晩期の環境と人々の生活 － 年代学の視点から －

国立歴史民俗博物館 工藤雄一郎

縄文時代は、狩猟採集漁労生活を中心とした定住的狩猟採集民の時代であり、約 16000 年前から 2500 年前頃までの長期間におよぶ。この間、縄文時代草創期から早期にかけては、最終氷期から後氷期へと大きく環境が変化するなかで、人々の生活も激変していった。また、環境が比較的安定した縄文時代早期末以降も、縄文海進に代表される気候の温暖・安定化、前期末～中期初頭に起こった気候の寒冷化、中期末～後期初頭に起こった気候の寒冷化・湿潤化などが起こっており、これらは人々の生活のスタイルを変えるような大きなきっかけとなった（辻，1988）。この間の気候変動には地球規模で発生しているものもあり、8200 年前頃を中心に寒冷化が起こった 8.2ka イベント、4200 年前頃を中心に寒冷化が起こった 4.2ka イベントなどがある。このうち後者は縄文時代中期の終わりから後期の初頭にかけて発生したものであり、当時の人々の集落規模や人口の縮小や、居住域が低地へと移り変わる生活スタイルの変化、植物利用の変化などとの関係が近年注目されている。

デーノタメ遺跡は縄文時代中期から後期の集落遺跡であり、特に中期の環状集落は関東最大級の遺跡として注目されている。また集落に隣接する低地部から多数の有機質の遺物が出土した貴重な低湿地遺跡でもある。この低湿地遺跡からは縄文時代中期の漆製品や中期から後期の多数の植物遺体が出土し、当時の植物利用の実態とその変化を知る上で貴重な遺跡である（北本市教育委員会，2017）。低湿地は台地上の遺跡と異なり、生業に関する情報が極めて豊富である。その一方で、土器を伴わない有機質遺物（種実など）や土坑や木組遺構は、時期決定が難しい場合がある。そのため、重要な有機質遺物・遺構については、年代測定を実施することによって、その時期を明確化していく作業が必要不可欠である（工藤，2012）。

筆者はこれまで、デーノタメ遺跡出土資料のうち、主に低湿地から出土した種実類や遺構群についての年代測定を行ってきた（工藤ほか，2017）。その成果を中心に、デーノタメ遺跡での人々の生活と古環境についてみていきたい。

まず、重要な資料としてウルシ材がある。木材としてのウルシはこれまで同定が難しかったが、能城修一らの研究によって 2000 年代に入って同定が可能となり、漆器が出土する縄文時代の集落のすぐ近くには、ウルシが栽培されていたと考えられるようになった。デーノタメ遺跡の 1 号木組などから出土したウルシ材は、縄文時代中期後葉の加曽利 E4 式から称名寺 2 式頃に相当する年代であった。おおよそ 4800～4200 年前に位置づけられる。デーノタメ遺跡では加曽利 E 式の漆塗土器片が出土しており、この時期には遺跡周辺にウルシが管理・栽培されていたのだろう。

縄文時代中期のデーノタメ遺跡低湿地を特徴付ける遺構にクルミ塚があり、1 万点以上のクルミ核の破片が出土している。これらの年代測定をおこなったところ、1 号～6 号クルミ塚の試料はいずれも縄文時代中期の年代を示し、おおよそ 5300～4600 年前頃のものであった。6 号クルミ塚の覆土最下層の試料が中期中葉の勝坂式期で最も古い年代を示したが、覆土最上層の試料が中期後葉の加曽利 E2 式頃と時間差があった。2 号クルミ塚の試料も同様に加曽利 E2 式頃に相当する。1 号・3 号・4 号クルミ塚の試料は加曽利 E3 式頃に相当する年代であった。縄文時代中期の加曽利 E2～E3 式期は、クルミを利用した後（核を割って食用となる仁を採取した後）の核を低地部に廃棄するような活動が多く行われていたことがわかった。

このほか、6 号土坑の覆土最下層から出土した炭化ダイズ属種子は 4240～4090 年前で、縄文時代後期前葉の堀之内式 1 式頃に相当する年代であった。また、3 号溝状遺構の最下層においてニワトコやコウゾが大量に出土した層準から採取したトチノキ種子は、4090～3930 cal BP の年代を示し、おおよそ縄文時代後期前葉の堀之内 2 式に相当する年代であった。縄文時代後期には、トチノキの利用が活発化するとともに、マメなどの様々な植物が利用されていた痕跡が明瞭になってきた。これは、東京都下宅部遺跡などで明らかになっている縄文時代中期から後期にかけての植物利用とその変化（佐々木ほか、2007）ともよく一致している。縄文時代におけるダイズやアズキの栽培化については近年活発に議論が行われており（小畑、2007；中山、2010 など）、デーノタメ遺跡ではどのようなマメ類が利用されていたのかが注目される。

#### 引用・参考文献

小畑弘己・佐々木由香・仙波靖子、2007. 土器圧痕からみた縄文時代後・晩期における九

州のダイズ栽培. 植生史研究, 15, 97-114 北本市教育委員会. 2017. デーノタメ遺跡. 北本市埋蔵文化財報告書第 21 集, 北本市教育委員会

工藤雄一郎. 2012. 「旧石器・縄文時代の環境文化史－高精度放射性炭素年代測定と考古学－」新泉社

工藤雄一郎・佐々木由香・能城修一. 2017. デーノタメ遺跡から出土した木材・大型植物遺体の<sup>14</sup>C年代測定. 「デーノタメ遺跡」. 北本市埋蔵文化財報告書第 21 集, 35-38, 北本市教育委員会

小林謙一. 2004. 「縄紋社会研究の新視点：炭素 14 年代測定の利用」六一書房

Noshiro, S. and Suzuki, M. 2004. *Rhus verniciflua* Stokes grew in Japan since the Early Jomon Period. 植生史研究, 12, 3-11

佐々木由香・工藤雄一郎・百原 新. 2007. 東京都下宅部遺跡の大型植物遺体からみた縄文時代後半期の植物資源利用. 植生史研究, 15, 35-50.

辻 誠一郎. 1988. 縄文と弥生：自然環境. 季刊考古学, 23, 35-38.

中山誠二. 2010. 「植物考古学と日本の農耕の起源」同成社

Wang, Y., Cheng, H., Edward, R. L., He, Y., Kong, X., An, Z., Wu, J., Kelly, M. J., Dykoshi, C. A., Li, X. 2005. The Holocene Asian Monsoon: Link to Solar Changes and North Atlantic Climate. *Science*, 308, 854-857.

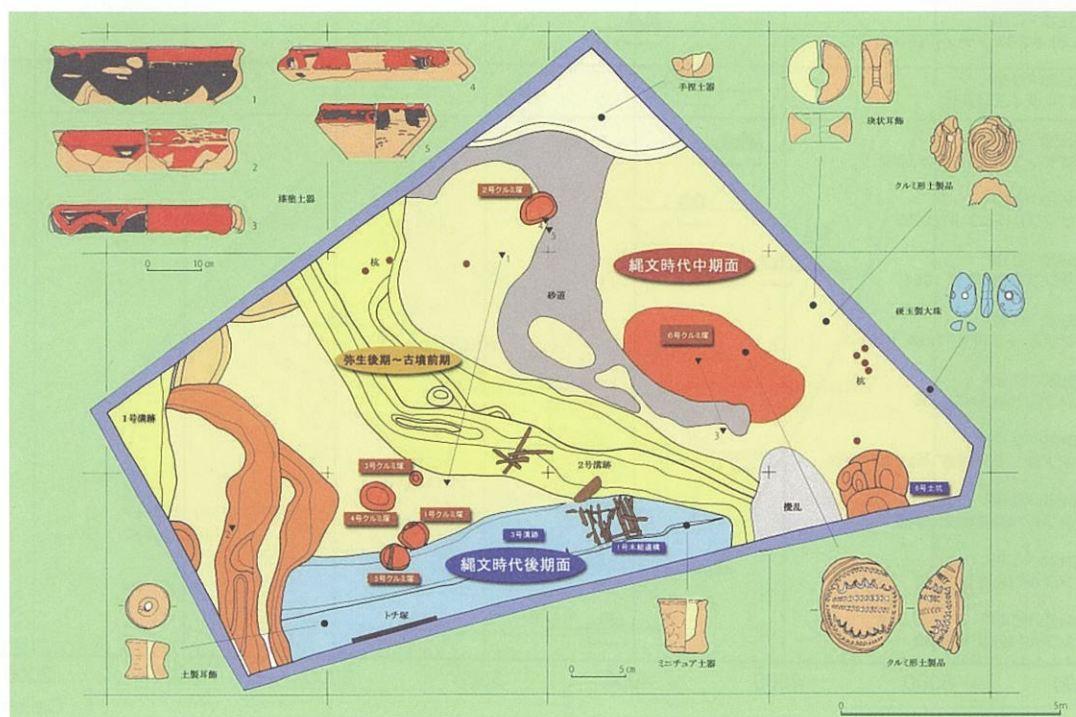


図 1 デーノタメ遺跡第 4 次調査区（低湿地部）遺構配置図（北本市教育委員会, 2017）

3500 3000 2500 2000 1500 1000 500 1calBC/1calAD

